



特集:コンピテンシー基盤型教育 3年目

将来の社会づくりは人づくりから

変化をおこす。人々の生命を守るために。社会をより良くするために。それは帝京SPHの大きなテーマです。みなさんは現在の人々の健康や生命、生活を取り巻く状況をご覧になってどのように感じるでしょうか。日本でも医療費の高騰や高齢化、国民皆保険制度の維持、健康格差など多様な課題があります。世界に目を向ければより幅広い課題があります。

TSPHニューズレター第1号で特集したように、人々の集団を対象に社会を治療していくイメージの公衆衛生では、さまざまな手段で人々の健康を支えることができます。そうした**将来の公衆衛生を担う実務家を育てること**。それにより**良い社会を目指す手段だと思いませんか？**

帝京大学では個々の教員はそれぞれが各専門の研究者でもあります、教育者でもあります。教育を通じて質の高い卒業生を輩出し、社会を変えていくことを目指すのも専門のひとつです。帝京SPHでは2013年に教育刷新を行いました。専門職の大学院としていかなる人材が必要なのか。**専門職の育成を行うプロフェSSIONALスクール**の役割とは何でしょうか。公衆衛生の実現のため、社会のために行う教育とは何か。そんな課題解決に自ら取り組むのが帝京SPHの教育の根幹です。「自ら取り組んでみる。」そういう前向きな大学院組織なのです。

道半ばで至らないところもあると思います。でも、実績と継続は力なり。**国際標準のカリキュラムを採用したSPH設立からはや6年**。現在の国際的水準の教育に不可欠なコンピテンシー基盤型教育を導入して3年を終えようとしています。本号では現在の帝京SPHに欠かせない教育の柱であるコンピテンシー基盤型教育を特集します。その成り立ちと、わが校が考えるコンピテンシー、そしてその教育の実践の一部をご紹介します。

◎ TSPH News vol 4. 目次

特集:コンピテンシー基盤型教育 3年目

- 2016年度後半 大学院生の活躍
- 2016年度後半の主なできごと
- 教員インタビュー 第4回
原 邦夫 教授(環境保健学)
- 公衆衛生 はじめの一步 生物統計学とは?
回答者: 牛嶋 大 講師(生物統計学)
- TSPHコホート 卒業生を訪ねて(4)
本間陽一郎さん(第4期生・医師)
- TSPHの窓 進化するハーバード特別講義
- 卒業式・卒業記念パーティ
- 社会医学系専門医プログラム 開始
- 2017年夏 帝京国際サマースクール開校

特集：コンピテンシー基盤型教育

2013年。帝京SPHの教員は次年度からはじまる博士後期課程(Doctor of Public Health:DrPH)の準備を行っていました。その当時、最初の草案として提案されたカリキュラムは、従来の医学部の大学院博士課程と同様のものでした。すなわち「博士(医学)」の取得者に求められる技能である、論文を執筆することに置いたカリキュラムです。

「専門職大学院(プロフェッショナルスクール)で授与する博士号は博士(医学)と違うのでは？」それこそが、その後のMPHとDrPHのコンピテンシー基盤型教育開発の発端となる疑問でした。そんな素朴な疑問から私たち帝京SPHの新しいカリキュラムづくりが始まったのです。

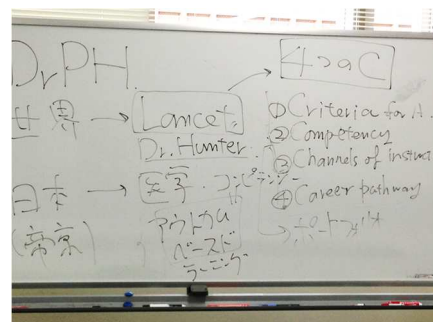
さて、従来型の教育に違和感をおぼえた教員たち。「われわれは専門職大学院(プロフェッショナルスクール)。専門職大学院が育成する博士号取得者が従来の研究重視の博士でよいのだろうか？」「専門職大学院で育成する博士号取得者は何を修了すればよいのか？」「DrPHホルダーの理想はどんな人？」「研究というのも大学院の博士課程では大事なスキルでもある

けれど・・・。」「高度な教育を受けた実務家が行う研究って何だろう？」「そもそも、公衆衛生の専門職大学院って何だろう？」

そんなことを考える教育変革の旅がはじまりました。それは、後に日本で初、そして世界でも先駆けになるSPHでのコンピテンシー基盤型教育の始まりでもありました。

専門職大学院(プロフェッショナルスクール)の博士号取得者って、どんな人？

一番の疑問はこれでした。「専門職大学院の博士号取得者とは一体どんな人だろう」ということです。課題解決のためにはまず、問題の認知・発見、そしてその定式化を行うわけですが(TSPHニュースレター第2号で特集したとおり、課題解決型教育は帝京SPHのもうひとつの柱です)、SPHでの博士課程教育に関する疑問に教員全員で取り組みました。ファカルティ・デベロップメント(FD・教員研修)としてほぼ毎週全員で教育について検討する日々が続きました。ときには先行している専門職大学院として、提携校のハーバード大学からビジネススクールの教員を招き、ビジネススクールの博士課程状況を尋ねました。実務に関わる行政官らに現場で求められる人物像を尋ねました。そして今、国際的な標準を目指すのであれば、どのようなカリキュラムにすべきなのか議論を重ねていきました。写真は当時の板書の1つ。懐かしい帝京SPHの歴史のひとつコマです。



今が世界の公衆衛生教育の転換点！

さて、海外の状況整理を通じて理解したのは、今は世界でも保健医療専門職や公衆衛生教育の転換期にあるということでした。帝京SPHの提携校のハーバード大学でもやはり米国でも先駆けとなる新しいDrPH教育を2014年から開始するところでした。その背景には、公衆衛生の課題の複雑化があります。広く社会経済的要因がかかわり、国境を越えた挑戦が公衆衛生で続く中で、知識だけではなく専門家の能力が求められていたのです。とくに2006年には米国でMPHのコンピテンシーモデルが策定され、また欧州でも公衆衛生大学院協会などが各大学院でカリキュラムモデルを作成していました。これには、世界保健機関(WHO)やランセットが編成した21世紀の保健医療専門職

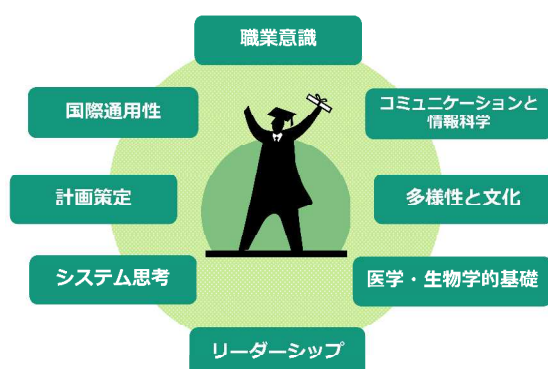
教育の検討委員会が関わっていました。それは社会のニーズに対応する、Change Agent(社会や組織を変えようような人)を育成するという方針であり、保健医療専門職の教育改革の流れも後押ししていました。さらに日本の文部科学省でも理論と実践の架け橋となるような専門職大学院の存在が求められるなど、専門職大学院の実務家教育は、世界でも日本でも転換点にあったのです。

そこから、帝京SPHでは公衆衛生専門職に必要な教育として、基本5領域という基幹と共に、わが校ならではの問題解決型アプローチ、そしてコンピテンシー基盤型教育導入を行うことに決めたのです。

これが、私たちが考える公衆衛生専門職(MPH/DrPH)のコンピテンシー

それから、教員全員が一丸となって、MPHとDrPHに必要なコンピテンシーを考えました。ほぼ毎週1回の全員による議論と、一部専門家による意見を取り入れて定めたのが、下にあげるそれぞれ8つのコンピテンシーでした。

MPH修了のために求められる資質・能力



DrPH修了のために求められる資質・能力



各コンピテンシーにはそれぞれの細目があり、目標と評価に用いています。

開学当初から、公衆衛生基本5領域は必須。問題解決能力を身につけること。

そして2014年度からコンピテンシー基盤型教育を開始しました。

新しい教育を始めようとしても、教員もこんな教育は受けていませんでした。しかし、現在は世界中どこに行っても、コンピテンシー基盤型教育を受けてきたSPHの教員はいません。そこで、私たち教員はこう決めました。「この教育をつくることは、私たち自身が**高い職業意識や倫理観**を持って、現在の日本の公衆衛生大学院教育を**批判的に吟味・分析**し、MPHやDrPHが活躍するフィールドの専門家や教員間でも**コミュニケーション**を密にし、**地域のことに心を寄せ**なければならないことではない。さらには、実際に出来上がったカリキュラムを**マネジメント**している、日本で初めてのコンピテンシー基盤型教育によるSPHの教育を行って**リーダーシップ**を発揮していくことで、日本の公衆衛生大学院教育を**国際通用性**があるよう**アドボケート**(動かしていく)しよう。」と。さて、みなさん。お気づきになりましたでしょうか？この私たちの姿勢の一連の流れは、すべて**DrPHのコンピテンシー**に含まれる要素なのです。そして日本でも、そして世界でもまだ新しいSPHにおけるコンピテンシー基盤型教育をつくりあげて実践することを通じて、教員自身も自らDrPHのコンピテンシーを身に着けるべく、自ら帝京SPHが動き出したのです。「帝京SPHが教育のChange agentになろう。そしてより優れたSPH教育を目指そう。」わたしたちは教育を通じて、より多くの人々を健康にする社会を目指したいのです。

教員たち自らが変化をおこすChange Agent. その思いが教育をつくる。

コンピテンシーはどのように身に着くのでしょうか。マネジメントの講義を受ければよいのでしょうか？わたしたちはコンピテンシー基盤型教育は座学だけでは成り立たないと思っています。もちろんクラスで教員の講義を聴くことが重要な時間帯もあります。ただ、それを本当に活用できるように。そして、知識を身につけるだけではなく、実際に社会を動かしゆく人になってもらいたい。そういう願いを込めて、各講義でもグループワーク、ケーススタディ、ディスカッションを従来以上に重ねています。また、学校の外での実習やインターンシップといった科目を充実させるに至りました。さらには、課題研究はすべての公衆衛生の基本5分野を身につけ、課題解決型アプローチで問題に取り組み、コンピテンシーを獲得していることを評価します。帝京SPHでは試験ができて、論文を書いただけでも卒業できません。「**あなたは実務の専門家として、得られた情報やエビデンスを用いて、どのように実際の課題の解決に取り組めますか？**」それを問われるのが帝京SPHの教育です。教員も、いかにコンピテンシーが身に着く授業ができるか試行錯誤しています。帝京SPHの講義が毎年新しくなるのはそのせいです。

試験で高得点？ 論文が書けた？ でもそれだけで帝京SPHは卒業できない。

だから講義も進歩する。そして評価も変化する。

教育というからには、評価が行われています。もちろん、各科目の授業では試験やレポート提出などがあります。そのうえに、授業内での参加が求められます。「出席」ではありません。「参加」です。単に教室にいて座っているかではなく、いかにディスカッションなどで発言していたかなどが問われます。

そして、もうひとつ、コンピテンシー基盤型教育ならではの方法が採用されています。それは、講座制をとらない帝京SPHならではの方法でもあります。全員の教員による学生への経過をたどる評価方法です。帝京大学では分野横断的な構成を活かし、学生の生活全般を支えるアカデミックアドバイザーと、研究の指導を行う研究指導教官がいます(詳細はTSPH News 第2号参照)。DrPHの学生にも主と副の2名の指導教員がついて

ます。それぞれが報告を提出し、やはり学生会議の場で状況を報告します。さらに、DrPHはフィールドや仕事での実践活動も問われることから、毎月学生は活動月報を提出しています。

このように教員は自分が担当している学生に関する報告を毎月書き、そしてそれを毎月一度の会議で状況を報告しあい、それぞれが入学時からどのように変化しているのか。経過を質的な評価で追跡しています。帝京ではこの継続した学生の記録(ポートフォリオ)を活用し、評価していきます。また、MPHやDrPHの卒業時にはコンピテンシーの達成度が問われます。SPHにおけるコンピテンシー基盤型教育が世界でも新しい取組であるならば、こうした評価も初めての試みです。先進的に教育をデザインして、情報を発信し、教育し続けています。

大きい課題でも 小さな課題でも 公衆衛生を実現する

動かす人(Change Agent)になるように すべては人々のために

しかし、帝京ではなぜ、かくも教育に力を入れるのでしょうか。それは私たち教員が日々、自らの研究を抱えながら、より良い社会を目指したいと思っているからです。公衆衛生が注目する人々と社会。それがこれだけ変化しているのなら、教育だって変わらねば。社会をより良くする手段として、私たちは人を育てていきます。人づくりとその社会への影響はかなり時間がかかる作業ですが、私たち教員自身のコンピテンシーも問われています。公衆衛生の実現に向けて、帝京SPHの挑戦は続きます。

この先の変化のための教育 それがコンピテンシー基盤型教育

2016 年度 後半の主なできごと

10月1-2日 外務省・JICA主催 グローバルフェスタ JAPAN 2016

SPHで行っている国際協力に関する研究や、国際保健の講義・演習など国際的な取り組みをより広く紹介するため、今年初めてグローバルフェスタ JAPANに出展しました。崎坂香屋子准教授が主導して、大学院生と教員・職員が一緒になって、当日の展示や企画を実施して盛り上げました。

10月18-20日 インドネシア保健省主催 国際シンポジウム

矢野教授と原教授がインドネシア保健省主催の国際シンポジウムに招待され、現在のアジア地域で課題となっている大気汚染についての講演を行いました。今後インドネシアを含むアジア各国との共同研究を企画しています。

12月15日・22日 課題研究 最終報告会

緊張の面持ちの中、今年も課題研究の最終報告会が行われました。全員の前での発表と報告書の提出をした後、教員からのコメントを受けて2月の最終提出とその最終審査合格を目指します。(6頁特集へ)

1月7日～2月3日 第6回 ハーバード特別講義

帝京大学新春の風物詩でもある特別講義は第6回を迎えました。益々充実している講義の様子、詳しくは次頁「TSPHの窓」でご紹介します。

2月9日 実習・インターンシップ報告会

当日は地域保健実習、終末期医療実習、インターンシップとして、東京都健康長寿医療センター研究所、パラグアイのJICA事務所での実習などについて紹介が行われました。実習もインターンシップも卒業のための単位として認定を受けることができます。また、実習やインターンシップの内容を最後の課題研究に結びつけている学生もいます。現場に出かけて問題に直面することで、より実践的なテーマに取り組む様子がうかがえました。

2月 ヘルスケアのためのマーケティング講座

広告業界での勤務が長い学生が講師となり、2回の講義を行いました。いかにしてメッセージを伝えるか。どのようにマーケティングを行うのか。それらは公衆衛生にとっても重要なことです。実際の広告業界の実例をもとに、たとえばあの商品の知られざる背景などを知ることができました。バックグラウンドが多様な学生が集う帝京ならではの企画でした。

キャリアセミナー 後期2回 (11月24日・2月23日)

SPHではキャリア担当教員が企画して公衆衛生領域で活躍する様々な分野の専門家などを招き、年間を通じてそのキャリア形成に関するお話を伺う機会を設けています。後期には2名の専門家をお招きしました。

株式会社メディカルエージェンシーの小林隆則代表取締役(11月)からは、病院情報システムのコンサルティングのお話を伺いました。2月には阿部 智 千葉市議会議員(2月)から、いかにしてデータをもとに議会と地域を動かすか。歯科医師と大学教員のバックグラウンドがある議員としての取り組みを伺いました。参加者は皆、熱心にそのキャリアパスと公衆衛生の社会での役割について学んでいました。

2016年の秋から冬にかけても様々な行事がありました。その一部をご紹介します。掲載できない分は、SPH オリジナルホームページとFacebookでも日々報告しています。どうぞご覧ください。



研究や業績、社会活動などの詳細と最新情報はTSPHオリジナルホームページをチェック！

2017年1月7日～2月3日 第6回ハーバード特別講義を開催しました

6年目を迎えたハーバード特別講義は今年も4名のハーバード大学教授と1名のオックスフォード大学教授を招いて行いました。ハーバード大学からは循環器疾患の疫学研究で知られるMurray Mittleman教授、生物統計の時系列分析で著名なGarrett Fitzmaurice教授を招いてディスカッションがある活発な講義が行われました。健康格差については世界でその研究が知られるイチロー・カワチ教授が講義を行い、社会疫学や行動経済学の理論に基づく最新の研究成果を紹介しました。環境と健康に関する講義はハーバード大学教授で同大医学部教育病院で活躍するRose Goldman准教授が小グループ学習を含めた授業を行いました。さらに医療経済の講義にはオックスフォード大学からAlastair Gray教授が来日。英国での実例を交えながら経済評価の講義をしました

（下の写真は左から上記教授紹介順）。

今年は一日体験も設けて門戸をさらに開きいたことから、週末に外部からも受講者が多かったのが印象的でした。また、今年度も日本学生支援機構（JASSO）の奨学金を取得できたこと、2016年9月のAPACPH国際会議の影響もあったためか、海外提携校からの参加も急増。北京大学、マヒドン大学、チュラロンコン大学、フィリピン大学などアジア8校の提携校参加者も多く、教室はまさにグローバルキャンパスと化していました。授業後には学生主体の各校紹介と交流会も行い、若手世代が意見交換をする機会もありました。

（下の写真は左から上記教授紹介順）。

ハーバード特別講義を核にしてつながりが広がっていくのが感じられました。毎年改善して進化を遂げるハーバード特別講義。今後ともご期待ください。

授業中はアジア各国からの留学生と共に、グループワークやディスカッションも行いました。



授業中はアジア各国からの留学生と共に、グループワークやディスカッションも行いました。



各セッションでは各提携校と帝京の学生の交流会も実施



毎年、最後はお待ちかねの終了証授与と記念撮影



2016年度 MPH 課題研究 報告

年度末は、みんなのがんばりと思い、そしてコンピテンシーの成長がつまった課題研究の仕上げの季節です。これは通常の修士論文に相当するものですが、帝京S P Hの課題研究はすべて、TSPHニューズレター第2号でもご紹介した問題決型アプローチでまとめています。12月の最終報告会終了後、最後のコメントを受けて1月初旬に課題研究報告書を提出します。この報告書についても審査を受けて最終修正を行います。そして2月に無事受理されると（単位も満たされていれば）晴れて卒業決定です！

2016年度MPH卒業生の課題研究テーマ

- ◆ フィリピンの医療施設で出産した女性の出産満足度に影響を及ぼす社会環境要因の検討
—出産の安全性と満足度の高い出産体験の両立に向けて—
- ◆ 整形外科で入院手術を行った患者データを使用した病院運営の効率に関する研究
—診療報酬請求データベースを用いた分析—
- ◆ 言わないと始まらない職場での母性健康管理—職場への早期妊娠報告の要因を探る—
- ◆ 離島における青壮年女性者の生活習慣病リスクを高める飲酒に係る要因と対策
- ◆ 外国人患者受入れのための病院サービスの向上—外国人患者受入医療機関認証制度
(Japan Medical service Accreditation for International Patients) JMIP認証病院との比較—
- ◆ 遊技場における産業保健スタッフの介入による従業員の腰痛の改善・予防
- ◆ 健康で幸福な社会づくりを目指した幸福度指標の提案にむけて
—主観的幸福感尺度の素案作成と幸福に係る社会生活環境因子の予備的検討—
- ◆ 麻酔覚醒時間の短縮を目指して —術中呼吸管理は麻酔覚醒時間に影響する—
- ◆ パラグアイ国サンホアキン市におけるCenso活用に基づいた生活習慣病改善への取り組み
—地域にあった解決策の検討—
- ◆ 公立学校教員の精神疾患休職者に関連する要因の検討
- ◆ 児童虐待リスク因子の評価—児童虐待ハイリスク症例の効率的な支援のために—
- ◆ 産業看護職による健康度の向上へのアプローチ
—健康管理が未整備の中規模事業所で、データ収集・分析と解釈、計画立案と評価方法作成まで—



課題研究は、在学中から学会発表や論文執筆につなげ、成果を公表していきます。特に1年コースでは修業期間内に投稿論文にしにくいことがありますが、それでも卒業してから働きながら足繁く大学に通い、論文を執筆する元学生もいます。

卒業後も客員研究員や協力研究員として在籍し、教員と引き続き研究を継続する道もあります。卒業後も継続して課題に取り組む卒業生をサポートしています。



◆◆◆ 大学院生の活躍 2016年度 後半 ◆◆◆

2016年度後半の大学院生の活躍をご紹介します。多くの経験を積んで頼もしくなっている学生たちに注目。

論文出版

渡邊純子さん(MPH2年)の課題研究で、中学生を対象とした学校での食育に関する論文がPLOS ONEに掲載されました。

Watanabe J, et al. Effect of School-Based Home-Collaborative Lifestyle Education on Reducing Subjective Psychosomatic Symptoms in Adolescents: A Cluster Randomised Controlled Trial. PLoS One. 2016 Oct 25;11(10):e0165285

著書

MPH1年コースで麻酔科医の蔵谷紀文さんが編集と執筆に関わった書籍が出版されました。

川名 信, 蔵谷紀文(編). エビデンスで読み解く小児麻酔. 克誠堂出版, 2016年11月.



受賞 第32回日本静脈経腸栄養学会 JEFFスカラーシップ賞 2017年2月28日

DrPH1年生の船山理恵さんがJEFFスカラーシップ賞を受賞しました。同賞は日本静脈経腸栄養学会会員で、臨床栄養に携わる医療従事者が、大学院などで新たに学ぶための学費援助を行う賞です。臨床栄養と公衆衛生を結ぶ今後の活躍を期待しています。

学会などでの発表 (筆頭演者)

第75回 日本公衆衛生学会総会 (大阪) 10月

渡邊純子 中学生の学校給食と食事摂取量との関連: 横断研究.

第5回 日本ポジティブサイコロジー医学会 (京都) 10月22日

喜多島知穂 ポジティブ意識に注目したポジティブサイコロジーの在り方: 問題解決アプローチによる提言

第19回 国際看護研究会 学術集会 (京都) 11月26日

上村いずみ フィリピンの医療施設で出産した女性の出産満足度に影響を及ぼす社会環境要因の検討. —安全性の確保と満足度の高い出産の両立に向けて—

原 あかね 外国人患者受入れのためのサービスの向上 外国人患者受入れ医療機関認証制度(JMIP)の効果: 未認証病院との比較調査

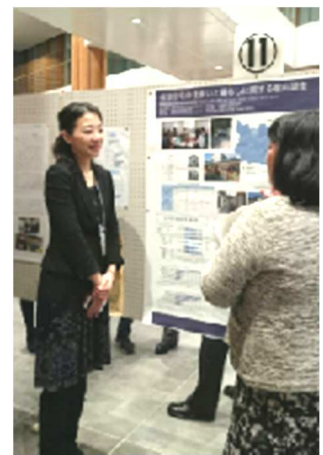
第87回 日本衛生学会 (宮崎) 3月26日～28日

天野方一 我が国における社会経済的地位と慢性腎臓病との関連について

白川良美 パラグアイ国サンホアキン市における生活習慣病の改善案の検討

西野真理 Safe tourism to active volcano (2): Risk perception and behavior of Japanese tourists in Owakudani, Hakone.

熊 燕 Safe tourism to active volcano (3): Differences in risk perception and behavior by nationality.



陸前高田グローバルキャンパス大学シンポジウム(岩手)2017年1月21～22日

伊東尚美さん・喜多島知穂さんが、崎坂香屋子准教授と共に行った陸前高田市仮設住宅の住まいと暮らしに関する意向調査結果を発表しました。

箱根火山防災協議会幹事会・第5回火山ガス安全対策専門部会

(神奈川) 2017年1月23日

DrPHの西野真理さん、MPHの熊 燕さんが矢野栄二教授らと共に行った箱根・大涌谷での火山ガスの被害防止のための観光客の意識調査について発表を行いました。この調査結果は東京新聞(2016年12月25日付)でも取り上げられました。



TSPH 教員インタビュー 第4回

持続可能な社会のために環境を守る。そんなミッションにふさわしい。優しい原先生の登場です！



原 邦夫 教授 専門：環境保健学・産業保健学

1982年 京都大学工学部卒業、1984年 同大学院工学研究科修士課程修了。その後、大阪府に公務員として勤務(1984～1992年)。労働科学研究所(1992～2005年)を経て、久留米大学医学部環境医学教室講師(2006～2009年)。医学博士(名古屋市立大学)。2009年に帝京平成大学教授に就任し、2014年から帝京大学大学院公衆衛生学研究科教授。

担当授業：環境保健学、産業保健学、リスク科学、産業環境保健学実習など

趣味：テニス、温泉めぐり



第4回は産業環境保健分野の原教授をお迎えしました。工学系のバックグラウンドがある原先生。そのご経歴をたどりながらお話を伺います。

－ 先生は工学部のご出身ですね。

はい。学部生当時は金属や鋳物をテーマに勉強していました。固いけれど軟らかくもなる金属の原理の解明です。研究に関わる中で小さな発見に参加した喜び、研究者の喜びを感じました。

－ 研究や実験をする喜びですか。

そうです。仮説をたてて、検証するために実験することが発見につながるという科学の一連の流れ。それを行う研究の面白さを知りました。そして実験の後に飲み会もあったりしたのもね。

ただ、私たちは金属を使ってもものづくりをするけれど、それだけでいいのだろうか？と思い始めたのもそのころです。ものづくりの一方で大量の廃棄物が出る。そんなことに興味を持ちました。

－ その後大阪府に就職されました。そこでのお仕事についてお聞かせください。

大阪府に地方公務員として就職して当時の大阪公害監視センターで大気の分析を担当していました。この頃の分析のお陰で今の自分の技術の基礎ができました。でも、分析していたのは自分で得たデータではないわけですし、自分で意見を言えない立場ではありましたがね。

－ 8年間の公務員生活の後、研究職に就かれますね。

大学時代の先輩からお声がかかって

労働科学研究所(現・大原記念労働科学研究所)に行くことになりました。ここでデータ収集の対象が変わりました。それまでは一般的な大気を対象にしていたのが、工場や職域といった働く場所の環境に変化した時期で、産業保健を扱うようになったのはこの頃からでした。企業の委託で調査事業を行い、報告書を書いたり研修を行ったり。自分でデータを取って分析をする仕事ができるようになりました。分析成果は論文として研究成果にもなりました。

－ 労働科学研究所(労研)で印象的だったことは何ですか？

労研には立派なメンバーが在籍していて、そこの学術雑誌に出版されるためには優れた査読が行われていました。そういう指導や助言が受けられたのは本当に恵まれていましたね。

－ そして研究から教育へ。久留米大学に移られます。

知り合いの先生から「来んね」と言われてね。環境医学教室でしたから産業保健や環境保健に従事しました。当時話題になっていたシックハウスなど空気中の有害物の相談を受けて、その測定を行っていました。それからHealth Impact Assessment(HIA)に出会ったのは久留米大学にいたときです。偶然ですが英国でHIAの5日間の研修に参加して。本当にHIAを知るためには自分でやらねえとわからないなという話になり、久留米市や大牟田市と共同研究を行いました。

※HIA: 健康影響予測評価。健康を指標とした行政評価方法の一つ

－ ほかに久留米で印象的だったのは

日常生活にメリハリがあったことです。平日は仕事、休日は九州内いろいろ出掛けました。久留米は九州地方の様々なところに足を延ばしやすくて、南は指宿、北は呼子(イカで有名)とか。温泉もよく行きました。霧島、阿蘇とかね。

－ そんな九州から帝京平成大学へ。そして帝京大学へ来られました。

ご縁があってまず2009年に帝京平成大学へ。2011年の帝京SPH設立時から既に非常勤講師としてきていました。だから帝京SPHの1.5世代目と呼ばれる…

－ 設立当初から知る原先生。帝京SPHはどのような大学院でしょう。

教育に対する確固とした理念があって、設立当初から理念を持って動いてきたのを感じています。国際水準を満たした大学院にするべく、公衆衛生の5分野の体系的な教育を徹底するとか。問題解決型教育とか。コンピテンシーもそう。良い理念がなければ、馬力だけで集団は動かせません。そういう優れた理念を掲げてきたのが今になって生きています。教員もだけれど、学生もよくついてきてくれた。そう思います。

－ 教育もコンピテンシー基盤型教育を導入して3年を終えようとしています。

講義で知識だけ教えても「忘れました」とすぐ言われることになったりしますね。学生本人に発表させて気づかせることが大事だと思います。だから講義はほどほどに。ケースで議論して教師がいるのを忘れさせるくらいでちょうどいいかもし

れない。教師はその議論に控えていてここぞというときにそばにいるくらいが良いかな。

- 産業衛生の実習にも多くかかわっていますが、教育の工夫を教えてください。

教育に携わっていると高度な産業医を座学で作ることができるかに疑問を感じます。現場で活躍するには現場の瞬発力が必要でしょう？本当に問題を解決するときには得ている知識を適用する中でホンモノになるはず。SPHで課題研究や実地研究を通じて得ることは大きいと思います。学生は社会人として持っている会社のいろいろな悩みを持ってきて、



共に議論しながら解決すべく取り組みますが、それは大いに教員のためにもなっています。答えがないので教員も本気で解決に取り組んでいますからね。

それから、労研時代から国際的な労働衛生研修にも関わっていて、中国、ベトナム、ネパールなどに行っています。Participant Oriented Action Training という参加型の研修に携わっていて、そこでも座学ではダメだということを学んできたんです。たとえば職場の写真を見せてグループで考えさせる。参加者の潜在能力に訴えるグループワークの方が良いなど。

- そんな教育が行われている帝京SPHの印象をお聞かせください。

学生がうらやましい！若いときに自分も来ていたら、公衆衛生を集中してみっちり勉強できただろうと思います。ときには彼ら同様涙が出るほどにね。これまでも疫学の本をたくさん読んだりしてきたけれど、ここでの勉強にかなうものはないかもしれない。矢野教授の疫学にガツンとやられたり…。多分、大学院教育という、ゼミ形式で本や論文の抄読会を行ったりするのが多いと思うけれど、ここはやはり専門職大学院。しかもちょっと違う一貫した教育理念があるのが良いですね。

- 話は変わりますが、先生の現在の研究について教えてくださいませんか？

今はタイの大気汚染分析やそこから派生して東京都の大気汚染の研究をしています。バンコクのバイクタクシー運転手の研究を継続していて、アジアの大気汚染がテーマの1つです。これまでの研究経験を活かしてインドネシアや中国、タイなどアジアの大都市圏での共同研究の準備をしています。あとは風力発電所の音の健康影響の研究に携わっています。

- 最後にこれから入学する人へひとこと

解決したい課題を持ってくると良いですね。疫学や統計などを体系的に学んで公衆衛生の考え方も学びつつ、みんなでディスカッションできると思います。あと、公衆衛生で環境保健に本腰を入れる人は少ないのが現状。公衆衛生は工学系から入りにくいかもしれないけれど、SPHでの取組が工学系で興味がある人への呼び水になるといいなと思います。これからも学生が良かったと思って卒業できるようにしていきたいです。

- 先生の知られざるお話もありました。「来たれ、工学系！」ですね。本日はどうもありがとうございました。

● 公衆衛生 はじめの一步 生物統計学とは？ 回答者：牛嶋 大 講師（生物統計学）

生物統計学(biostatistics)というと、広い意味では統計学の中で生命現象を扱うものすべてを表しますが、公衆衛生学分野においては人の健康、疾患などを主に扱い、医学、薬学、疫学などの分野で必要なデータの収集および解析の方法について研究する学問です。

医学研究において最もよく用いられる解析手法として、生存時間解析やロジスティック回帰分析があります。生存時間解析では、例えばがんの2種類の治療法を比較する場合、観測開始から死亡あるいは転移再発といったイベントまでの期間に違いがあるかを統計的検定によって調べます。それと同時に他に生存時間に影響する因子があるかどうかを調べます。ロジスティック回帰分析は、通常の回帰分析と異なり結果が「効果あり」「効果なし」など2つのうちいずれか、という場合に用いられる解析手法です。いずれの解析においても、医学研究では被験者の属性として年齢、性別などさまざまな情報が利用できることが多く、多変量解析の方法を用いて結果を予測する数理モデルを構築する、という方法が一般的です。

次にデータの収集についてですが、人を対象とした臨床研究を行う場合、被験者に対する倫理的な配慮が必要なほか、研究の費用や時間もなるべく少なくする必要があります。したがって2群で奏効率を比較する試験の場合は、2群間に統計学的な有意差が期待できる最小限の例数を求め、脱落を考慮して例数の設計を行います。このとき、2群でどの程度の差が期待されるか、検定の有意水準、検出力(期待される差があった場合に統計的有意差が検出される確率)といった情報を用いると、必要な例数(サンプルサイズ)を理論的に計算することができます。最近では複雑な臨床試験も増えてきており、そのような場合の例数設計や解析法の開発が生物統計に求められています。

生物統計の専門家は、新薬や新しい治療法の開発のために臨床試験を行う上で参加が必須とされますが、国内には専門家が少ないのが現状です。たくさんの人に生物統計を学んでいただき臨床や公衆衛生の現場で役立てていただきたいと思います。



TSPHコホート：卒業生を訪ねて（４）

本間陽一郎さん

（医師・第4期生）

帝京SPHで現在同窓会長を務める本間さんにお話を伺いました。医学部卒業後に外科と消化器内科に勤務された後SPHに入学されました。現在は静岡県内の聖隷浜松病院で総合診療内科医として活躍されています。仕事をしながらMPH取得を目指す方、地方からの通学をお考えの方、同窓会に興味がある方へのメッセージが満載です。

2016年度卒業パーティでの挨拶の様子



－ まず最初に、そもそもMPHを知ったきっかけを教えてください。

米国に留学していたことがあるのですが、そのときに肩書が「MD, MPH」（医師かつ公衆衛生専門職修士）という同僚がいて気になっていたことです。

－ 気になっていたMPH。自ら取得しようとしたのはなぜですか？

そうですね。もともと外科経験がある消化器内科の臨床医だったのですが、総合診療内科医となったときに「 $+\alpha$ 」を持つと思ったのがきっかけです。「 $+\alpha$ 」のひとつは外科での経験があることですが、それと何かもう一つの得意分野としてMPHを取得しようと思いました。

－ 帝京大学SPH時代の学生生活を振り返っていかがでしたか？

よく新幹線に乗ってました（笑）。浜松で病院勤務しながら通学していたので。

－ そうでしたね。働きつつ、しかも地方からの通学でMPHを1年で取得されました。当時の1週間の様子を教えてください。

まず火曜日の朝に出発して大学に行きました。火・水曜は大学にいて東京に泊まり、木曜の授業後の夜に帰宅するという流れです。帝京SPHでは必修の授業が水・木曜日に集中していて、火～木曜日の通学で何とかできました。通学

の新幹線の中で時間をどう使うかにかかっていましたね。

－ そんなSPHでの授業や学生生活への感想を聞かせてもらえますか？

面白かったです。これまでまったく知らない分野の人と関わって交流できました。たとえば同級生で薬剤師の某氏。今や起業して社長ですよ！やいろいろな人がいること、医師だけでなく医療従事者以外もいる。そんな多様性が良いところでした。

－ 学生生活で大変だったことは？

通学です…。火曜と水曜に大学にいるときに大学院生室で宿題や課題を終えるように集中して、その後、東京滞在の日にはアルバイトもしていました。

－ 何だか忙しくてぎっしり詰まった生活だったようですが、SPHの仲間との思い出はありますか？

思い出ではなくて、今も続くつながりです。でも、大学近くの十条の思い出といえば、や台寿司というお寿司屋さんですね。同級生とよく行きました。

－ 「今も続く」というのはわたしたちにとっても嬉しいことばです。さて、ここからは卒業された後のことを伺います。現在のお仕事についてお聞かせください。

病院で総合診療内科医として勤務しています。診察だけではなく、病院の研修医のEBM教育に携わっていて、論文を読み書きと研究のためのワークショップを開催しています。あとは病院の情報発信のために動画を作成・発信するYouTuberでもあります。

－ 多彩な活躍ぶりですね。病院で臨床医として勤められていますが、MPHが活かされていますか？さきほど言っていた「 $+\alpha$ 」として満足していますか？

MPHには満足しています。あとは統計の仕事に依頼されることが多くなりました。在学中より卒業後の方がSAS（公衆衛生の生物統計の分析ソフトウェア）で分析しているんじゃないのかな。

－ 臨床の現場でも公衆衛生が活かされているということですね？

もちろん。僕は、公衆衛生＝医療だと思っています。公衆衛生は医師には絶対必要な素養です。よく医療は「臨床、研究、教育」というと3つの円で描かれて別ものということになりがちですが、どれも本来は同じ場にあるべきものです。

－ そんな医療の現場での今のお仕事で大事にされていることを教えてください。

実はやりたい仕事もやりたくない仕事もないのですが…とはいえ、与えられた仕事に対して創造と探求を迫及する。つまり、一生懸命やることです。つまらないこともまずは興味を持って無視しないことですね。無視したらオモシロくないですから。そういえば、職場で「雑用」ということばを使うのをやめました。「マネジメント」と呼ぶことにしているんです。どんな仕事も職場に大切なこと。職場で困っている人をみたら共感すること、話を聞くこと。壊れた機械も直そうと試すことなど。どれも実は雑用ではなくて職場を動かすのに大事な仕事。だからマネジメント。そう思ってひとつひとつ一生懸命取り組むことですね。

－ うーん。実に本間さんらしい。ところで、現在は帝京SPHの同窓会長としてもご活躍です。同窓会活動やそのビジョンについて教えてください。

同窓会では数か月に1度集まる機会を設けています。同窓会ホームページやFacebookも開設しました。（右中段ノ）

祝・卒業 3月21日 帝京大学卒業式 挙行

MPH6期生とDrPH初代修了生の門出 全学卒業式は日本武道館で行われました

2016年度の帝京大学卒業式が3月21日午前日本武道館で挙行され、帝京大学SPH修了生には公衆衛生学修士(専門職)(Master of Public Health, MPH)が授与されました。今年度は帝京SPHの新しい教育・コンピテンシー基盤型教育の礎にもなった博士課程(DrPH)からも初代卒業生が門出を迎えました。午後には、なじみ深いいつもの講義室にて研究科個別の学位記授与式を行いました(産業保健高度専門職養成の大学院プログラムの修了式も同時開催)。夕方からは毎年恒例の卒業記念パーティ。当日は二次会も開催され、学生も教員も夜遅くまで名残惜しみつつ、懐かしい話や今更知ること(?)に花を咲かせていました。晴れの日になごさしい華やかな一日を全員で過ごし、次のステップに進む卒業生を送り出すことができました。

4月からはそれぞれの道を進みますが、卒業生が進む様々な道で、公衆衛生の課題解決を進めていくことを期待しています。どんなときでも母校を訪れてください。あの、おなじみの先生方がいつでも卒業生を待っていますから。教員一同、いつまでも心から応援しています。これからは同窓生として帝京SPHと一緒に盛り上げていきましょう。



1人1人に学位記を授かる
山岡研究科長

それぞれの仲間と教員と

卒業パーティ開催時の集合写真。
それぞれの思いを胸に。

同窓会のビジョンのまず1つ目ですが、それは同窓会を同窓生それぞれのStudy(研究成果)を出す場にしないことです。そうではなくて、Inside—たとえば調査をはじめまでの過程や仕事の経過などを共有するところにしたいんです。何をやろうと思って、どうやったのか。どうもがいて失敗/成功したか、など。研究でなくてもいいです。ボランティアでも日々の仕事のことでいい。とにかく成果発表会だけにならないようにしています。成果は学会とかしかるべき場所ですればいいじゃないですか?でもそうではない情報が交換できる場。それが同窓会の良さだと思います。

もうひとつは、ポジショントーク(人の肩書や地位で気をつかう話ぶり)が起らないようにしています。いろいろなバック

グラウンドの人がいるのがSPHの良いところですから。医師の学生だって先生なんて呼ばない。だって、こんな場はほかにはないでしょう? MPHホルダーの卒業生としてさらの状態でいられる場を大事にする。そんな同窓会にしたいです。あとは自分が今やっている仕事「MPHの仕事だよ」と確認できる場にすることかな。みんなの多様性を持ち寄って。

同窓会長としても関わられ、卒業生とから見たSPHをひと言で説明するなら?

SPHはハブ(Hub)だと思っています。専門職大学院と言いますが、実は既に何等かの専門を持った人々の集まりですからね。そして今、公衆衛生だけのごはんを食べていけるのはごく限られた人々だけ。だからまずはSPHという色々

な人がいる場で多くの人とネットワークを築き、「この分野では誰がいる」というように人を紹介できるようにすることが大事。そういう紹介できる人のつながりを沢山つくることだと思っています。そして一人一人がそうやって紹介しうる人になってほしいです。将来の入学生もそうなることを期待しています。

心強いメッセージ、そして貴重なお話。お忙しい中どうもありがとうございました。

一見クールでも実はアツい本間さんのインタビュー。「情熱大陸」(葉加瀬太郎さんの)がBGMで流れていた気がします…。割愛しましたが当日は多くのお話を伺いました。

卒業後もつながり続ける帝京SPH。だからそう。「私たちは医療と社会をもっと良くできる!」

来年度も多彩なプログラムを準備しています。
あなたに合う学びのスタイル、きっとある。公衆衛生なら帝京SPH

帝京大学大学院・社会医学系専門医プログラム

社会医学系専門医はMPH/DrPHと同時に取得する

帝京大学大学院社会医学系専門医プログラムは、帝京大学大学院公衆衛生学研究科および医学研究科において、専門職学位課程学位(MPH)博士後期課程学位(DrPH)または博士(医学)(PhD)の取得をめざしながら、社会医学系専門医の専門研修を行うプログラムです。社会医学の実践を行いつつ、MPH、DrPHまたはPhDという高度な専門的な知識と能力、本研修プログラムの特徴となっています。大学院に入学せず、本プログラムのみ在籍して研修を行うことが可能です。

対象：医師（初期臨床研修修了・修了予定者）

帝京大学産業保健高度専門職養成の大学院プログラム

来たれ 産業衛生のプロフェッショナル。あなたの働く力こそ、学ぶ力と動かす力

産業保健に関する学び直しやキャリアアップのため、社会人を対象にした産業保健分野の高度人材養成のための履修証明書(学校教育法に基づく)プログラムがあります。毎年定員約10名です。

対象：主に産業保健の専門職（産業医、産業看護師、産業保健師、労働衛生／安全コンサルタント、安全管理者、衛生管理者、作業環境測定士、臨床心理士など）

帝京国際サマースクール 開催決定

英語で公衆衛生 夏のグローバルキャンパス集中講義



今年は帝京大学と海外提携校からの参加者を交えた夏季集中講義を行います。今年は夏もぜひ帝京SPHで！

Healthcare Management ヘルスケア・マネジメントー公衆衛生領域における組織行動学

2017年8月12～15日(土～火) 講師：中田善規教授

Universal Health Coverage & Aging Society 少子高齢社会におけるユニバーサル・ヘルス・カバレッジ

2017年8月21～26日(月～土) 講師：井上まり子准教授 ほか外部講師とフィールド訪問

編集後記

物理学者のアインシュタインは、「学校で学んだすべてを忘れてもなお残っているもの。それが教育である。」ということばを残しています。それは私たちが学業や勉強として知識として持っているものはいずれ失うかもしれないが、体験などを通じて身に着けた素養や資質としてのコンピテンシーは残るということばに聞こえます。そして、学校で得た、かけがえのない友人や教員とのつながり、そして専門職大学院での多忙な日々を乗り越えた力への自信はずっと続くものだとも思えます。

今回の特集では卒業後も残りゆくであろうMPHとDrPHのコンピテンシー基盤型教育を取り上げました。帝京SPHの先進的な取り組みをお伝えできたでしょうか。そしてインタビューや卒業式を通じ、同窓生や先生方とのつながりも一生ものであることを強く感じました。帝京SPHでは来年からも多くの学びの機会と場を用意し、教育を通じた公衆衛生の実践に務めていきたいと思っています。

発行：帝京大学大学院 公衆衛生学研究科

お問い合わせ

帝京大学板橋キャンパス 事務部教務課

〒173-8605 東京都板橋区加賀2-11-1

TEL: 03-3964-3294 (直通)

e-mail: tsphgakkui@teikyo-u.ac.jp

編集・制作：桑原恵介・井上まり子